

らかな少年です。そしてそんな清らかな心は、フェリクスのような少年らしい少年が持つことのできる、何よりも最高のものですね」

イエスさまの言葉に、フェリクスは耳がまつ赤になりました。ひとつには、うれしさと誇らしきのために。しかし同時にまた、恥ずかしくていたたまれない気もちにもなったので。やがてフェリクスは、揺りかごの前にひざまずき、頭を垂れました。

赤子のイエスは、フェリクスの髪をやさしく撫でて、その手で祝福を与えました。そのとたん、フェリクスは何だか不思議に体が暖かく、気もちよくなつたので、自分は今、天国にいるのではないかと思いました。

もちろん、まさかフェリクスが天国にいたわけはありません。フェリクスは今、ベツレヘムの牛小屋にいるのです。そして小屋の外では、五七人の市長ならびに町長さんたちが、自分たちが中に入れてもらえるのを、今か今かと待ちかねています。

そこで小さな天使は、あのニット帽を頭にかぶつた天使は、フェリクスのもとに近づいて、耳もとでささやきました。今からわたしに付いてきてください。いや、もう家に帰つてもらうというわけじゃありません——。いえいえ、とんでもない。ここからちよつと歩いて、牛小屋の奥に行きましょう。ほかの子どもたちが、そこで待っていますから。



この牛小屋の奥、牡牛やロバがいるところに、男の子と女の子が数人ずついました。みなフェリクスと同じ年ごろの子どものたちようです。今日の聖なる夜に、この子たちもベツレヘムに導かれ、牛小屋にいる赤子のイエスさまのもとを訪れることを叶えられたのでした。フェリクスと同じように、この子たちも家で寝ているところを小さな天使に起こされて、飼い葉桶のもとに連れてこられたのです。そしてこの子たちはまた、ヴルツェルスドルフ村のフェリクスとまったく同じように、はつきり言ってお行儀がよいとは言えないけれど、でも何より、心のとても清らかな子どもたちなのでした。